

## 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	山家 良輔
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部 教授 岩瀬 陽子 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 裕 哲崇 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 谷口 裕重
論文題目	口腔機能に関する要因が食欲に及ぼす影響
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>近年、特に医療および介護の領域において高齢者の食欲低下への対応が重要視されている。高齢者の食欲低下は加齢に伴う食欲減退と食物摂取量の減少と定義されており、先進国では地域在住者で 22 %，介護施設入所者で 30 % 以上，急性期病院入院者では 42 % の高齢者にみられるという報告があり、我が国のみならず世界的にも対応が注目されている分野でもある。加齢による食欲低下は、年齢に伴う食欲と食物摂取量の減少と定義されており、生理学的・病理学的および社会的要因に起因するため、高齢者のみならず疾患のない成人でも起こり得る。さらに、食欲低下が低栄養・サルコペニア・虚弱・全身機能低下および疾患罹患率や死亡率と関連することも報告されており、食欲低下を改善する方法が望まれているという現状がある。本研究はその一法とし、歯科領域である口腔機能に注目したアプローチであることから新規性が高く、歯科からの発信が可能かつ医療・介護の領域において歯科の意義を示しうる興味深い内容である。本研究の結果は社会への波及効果が期待できることから、今後、学術的な観点からも継続して推進すべきである。</p> <p>本研究では、被験者を地域の歯科診療所を受診した患者のうち、補綴・保存処置などの歯科治療が終了し、本研究への参加に同意が得られた成人 71 名を対象としている。口腔機能検査として用いた項目は、日本老年歯科学会にて口腔機能低下症の診断方法として確立されている 7 種の検査項目（口腔衛生状態，口腔乾燥，咬合力：残存歯数，舌口唇運動機能，舌圧，咀嚼機能，嚥下機能）である。また、質問紙調査として信頼性と妥当性が検証されている食欲調査の CNAQ，摂食嚥下障害スクリーニングの EAT-10，栄養状態評価の MNA-SF も使用している。口腔機能低下の自覚症状についてはオーラルフレイルの質問項目を参考に今回自作しており、①水分でむせる，②食物が喉に引っかかる，③食事時間の延長，④口渇，⑤呂律の回りにくさ，⑥長時間の会話で疲れる，⑦食物の口腔内残留感の 7 項目を聴取している。分析においては性別・年齢・口腔機能検査および口腔機能低下の自覚症状と食欲低下の関連を <math>\chi^2</math> 検定，Fisher の直接法を用いて分析している。加えて性別・年齢・口腔機能検査および口腔機能低下に関する自覚症状を説明変数とし、食欲を目的変数とする単変量および多変量ロジスティック回帰分析を実施し、危険率 5% を用いて有意性の検討をしており、統計学的解析手法は適切である。</p>	

本研究で得られた結果は以下の通りである。

1. 咀嚼機能と食欲低下との間に関連性を認めた。
2. 嚥下機能と食欲低下との間に関連性を認めた。

本研究では咀嚼機能・嚥下機能と食欲が関連し、嚥下機能の低下が食欲低下に繋がる可能性が示されている。研究対象が地域歯科医院を受診し、かつ補綴・保存処置などの歯科治療後の者であるため、義歯の状態不良に該当する者がいなかったことから、義歯や残存歯に問題がなくても咀嚼機能が低下すると食欲が低下することが示された。これは加齢などの影響による咀嚼機能低下が、摂取可能な食物の制限ひいては食べる喜びの減少に繋がり、食欲が低下する可能性も推察される。さらに嚥下機能においては、本研究では簡便な方法を用いて評価しているが、嚥下機能低下と食欲低下には関連が認められることが示されている。一方で、口腔機能低下の自覚症状については、単体では一部の項目で食欲低下との関連性がみられたものの、多変量ロジスティック回帰分析では有意な関連は認められなかったことから、口腔機能低下の自覚症状は食欲低下との関連は認められなかったと述べられており、研究対象者の偏りによる影響や質問紙調査の限界について考察されている。

以上の結果より、咀嚼機能、嚥下機能を向上することが食欲低下の改善およびフレイル、サルコペニアの予防に寄与することが推察され、咀嚼機能および嚥下機能の維持・向上が食欲の維持・改善に影響を及ぼす可能性がある結論づけている。

本研究で得られた知見は、食欲と摂食嚥下機能との関連解明につながる大変価値の高いものであり、今後の障害者歯科学の発展に大いに貢献するものと考えられる。よって審査委員は、本論文を博士（歯学）の学位の授与に値すると判定した。